

国語学習プリント

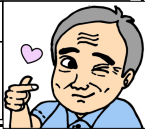
date : 年 月 日

学習内容：読書 読み取り

年 組 番

オツベルと象

氏名



オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いが物語る。

第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲こき機械の六台も据えつけてのんのんのんのんと、おそろしい音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきり真つ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたづけしからこいていく。わらはとどん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりて、変にぼうつと黄色になり、まるで砂漠の煙のようだ。

その薄暗い仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして氣をつけたが、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はすいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回っているから、のんのんのんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ。ペンキを塗ったのではないぜ。どういわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだらう。

そいつが小屋の入り口に、ゆつくり顔を出した時、百姓どもはぎょつとした。なぜぎょつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大変だから、どうも皆、一生懸命、自分の稲をこいでいた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないとこいふつて、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎょつとした。それでも仕事に忙し、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やっぱり稲をこいでいた。

オツベルは奥の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大

きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢よく、前足二つ突き出して、小屋に上がつてこようとする。百姓どもはぎょつとし、オツベルも少しぎょつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつと煙を吐き出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆつくりそこらを歩いていた。

そしたらどうとう、象がこのこ上がつてきた。そして機械の前のとこを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回っていて、もみはタ立かあられのように、パチパチ象に当たると、象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

オツベルはやつと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいないい声で、こんな文句を言ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂が私の歯に当たると、全くもみは、パチパチ。パチパチ歯に当たり、また真つ白な頭や首にぶつかる。」

さあ、オツベルは命がけだ。パイプを右手に持ち直し、度胸をすえてこつと言った。

「どうだい、こはおもしろいかい。」

「おもしろいねえ。」象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「ずつとこつちにいたらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは言つてしまつてから、にわかにがたがた震えだす。ところが象はけろりとして、

「いてもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしくしくして、真つ赤になつて喜びながらそう言った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売り飛ばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。それにこの前稲こき小屋で、うまく自分のものにした、象も実たいしたもんだ。力も二十馬力もある。だいいち見かけが真つ白で、牙は全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮なのだ。そしてすいぶん働くもんだ。けれどもそんなに稼ぐ

のも、やっぱり主人が偉いのだ。

「おい、おまえは時計はいらないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこつと言った。

「僕は時計はいらないよ。」象が笑つて返事した。

「まあ持つてみる、いいもんだ。」こつ言いながらオツベルは、ブリキでこえた大きな時計を、象の首からぶら下げた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「鎖もなくちゃだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前足にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三足歩いて象が言う。

「靴を履いたらどうだろう。」

「僕は靴など履かないよ。」

「まあ履いてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を、靴の上からはめ込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二足歩いてみて、さもうれしそうにそう言った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておつた。

「すまないが税金も高いから、今日はすこし、川から水をくんでくれ。」オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。

「ああ、僕水をくんでこよう。もう何杯でもくんでやるよ。」象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。そして菜葉の畑にかけた。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ。」と言つていた。

「すまないが税金がまた上がる。今日はすこし、森から薪を運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突つ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、僕薪を持つてこよう。いい天気だねえ。僕はぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」象は笑つてこつと言った。

オツベルは少しぎょつとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかに愉快なふうで、ゆつくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきをつして、百姓どもの仕事のほうを見に行つた。

その昼過ぎの半日に、象は九百把薪を運び、目を細くして

国語学習プリント

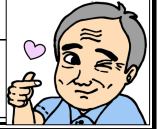
date : 年 月 日

学習内容：読書 読み取り 続き

年 組 番

オツベルと象

氏名



喜んだ。

晩方象は小屋にいて、八把のわらを食へながら、西の四日の月を見て、

「ああ、せいせいした。サントマリヤ。」と、こう独り言したそのだ。

その次の日だ。

「すまないが、税金が五倍になった。今日はすこし鍛冶場へ行って、炭火を吹いてくれないか。」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、僕、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

オツベルはまたどきどきとしたが、気を落ち着けて笑っていた。象はその鍛冶場へ行って、べたと足を折って座り、ふいこの代わりに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把のわらを食へながら、空の五日の月を見て、

「ああ、疲れたな、うれしいな、サントマリヤ。」と、こう言った。どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。よくまあ、五把のわらなどで、あんな力が出るもんだ。

実際、象は経済だよ。それというのもオツベルが、頭がよくて偉いためた。オツベルときたらたいしたものさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしてたんだが、いなくなつたよ。

まあ落ちていて聞きたまえ。前に話したあの象を、オツベルは少しひどくすきた。仕方がだんだんひどくなつたから、象がなかなか笑わなくなつた。ときには赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食へながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サントマリヤ。」と言つたということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食へずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サントマリヤ。」と、こう言った。

「おや、なんだって？ さよならだ？」月がにわかに象にきく。

「ええ、さよならです。サントマリヤ。」

「なんだい、なりばかり大きくて、からつきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月が笑つてこう言つた。

「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしく泣きだした。

「そら、これでしよう。」すぐ目の前で、かわいい子どもの声がした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立つて、ずり紙をささげていた。象は早速手紙を書いた。

「僕はすいぶんめに遭つてゐる。みんな出てきて助けてくれ。」童子はすぐに手紙を持って、林の方へ歩いていった。

赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうど昼飯頃だった。この時、山の象どもは、沙羅樹の下の暗がり、暮などをやっていたのだが、額を集めてこれを見た。

「僕はすいぶんめに遭つてゐる。みんな出てきて助けてくれ。」象は一斉に立ち上がり、真黒になつてほえたした。

「オツベルをやつつけよう。」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、出かけよう。グラアラガア、グラアラガア。」みんなが一度に呼応する。

さあ、もうみんな、嵐のように林の中を鳴き抜けて、グラアラガア、グラアラガア、野原の方へとんでいく。小さな木などは根ぎになり、やぶやなんかもめちやめちやだ。グワアグワア、グワアグワア、火花みたいに野原の中へとび出した。それから、なんの、走つて、走つて、どうとう向こうの青くかすんだ野原の果てに、オツベルの屋敷の黄色な屋根を見つけると、象は一度に噴火した。

グラアラガア、グラアラガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上で昼寝の盛りで、からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向こうを見た。林のような象だらう。汽車より速くやつてくる。さあ、まるつきり、血の気もうせて駆け込んで、「だんなあ、象です。押し寄せやした。だんなあ、象です。」と、声を限りに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやつぱり偉い。目をぱちりとあいた時は、もうなにもかもわかつていた。

「おい、象のやつは小屋にゐるのか。いる？ いるのか。よし、戸を閉める。戸を閉めるんだ。早く象小屋の戸を閉めるんだ。ようし、早く丸太を持ってこい。閉じこめたまえ、ちくしよめじたばしやがるな、丸太をそこへ縛りつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてゐるんだ。ようし、もう五、六本、持つてこい。さあ、だいたいしようぶだ。だいたいようぶだとも、慌てなつたら。おい、みんな、今度は門だ。門を閉める。かんぬきをかえ。突っ張り。突っ張り。そうだ。おい、みんな心配するなつたら。しっかりしろよ。」オツベルはもう支度

ができて、ラッパみたいないい声で、百姓どもを励ました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に

巻き添えなんぞ食いたくないから、みんなタオルやハンケチや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。

オツベルはいよいよ躍起となつて、そこら辺りを駆け回る。オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

まもなく地面はぐらぐらと揺られ、そこらはばしやばしや暗くなり、象は屋敷を取り巻いた。グラアラガア、グラアラガア、その恐ろしい騒ぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」優しい声も聞こえてくる。

「ありがたう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、周りの象はいつそ

うひどく、グラアラガア、グラアラガア、堀の周りをぐるぐる走っているらしく、たびたび中から、怒つて振り回す鼻も見え

る。けれども堀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象も壊せない。堀の中にはオツベルが、たつた一人で叫んでいる。百姓どもは目もくらみ、そこをうろうろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間の体を台にして、いよいよ堀を越しかかる。だんだんにうとうと顔を出す。そのしわくちやで灰色の、大きな顔を見上げた時、オツベルの犬は気絶した。

さあ、オツベルは撃ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グラアラガア、ドーン、グラアラガア、ドーン、グラアラガア。ところが弾は通らない。牙に当たれば跳ね返る。一匹なぞはこう言つた。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチ、パチ顔へ当たるんだ。」

オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだと思ひながら、ケースを帯から詰め替えた。そのうち、象の片足が、堀からこちへはみ出した。それからもう一つはみ出した。五匹の象がいつべんに、堀からどつと落ちてきた。オツベルはケースを握つたまま、もうくしやくしやくに潰れていた。早くも門が開いていて、グラアラガア、グラアラガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変瘦せて小屋を出た。

「まあ、よかつたね、瘦せたねえ。」みんなは静かにそばに寄り、鎖と分銅をはずしてやつた。

「ああ、ありがたう。ほんとに僕は助かつたよ。」白象は寂しく笑つてそう言つた。

おや、川へはいっちゃいけないつたら。

国語学習プリント

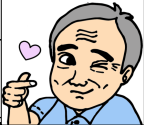
date : 年 月 日

学習内容：ワークシート1

オツベルと象

氏名

年 組 番



―通読後―

◎小説の構成をとらえる

▼誰が語る構成となっていますか。

(牛飼 い)

……ある(牛飼 い)が物語る。

つまり、(牛飼 い)が、ナレーター「語り手」となって話している。

◇いつ来て話をするのか。

第一日曜

第二日曜

第五日曜

◇誰に語っていると思われるか。

子供たちと思われる

◇どんな場所だと思われますか。

とある川沿いの村の河川敷または公園

※最後の一行から

まるで昭和の紙芝居のよう

◎第一日曜

▼オツベルとはどのような人物か

機械化された農場のオーナー

中間管理職的でえらそう

・新式稲こき機械：新しもの好き

・六寸ぐらいのビフテキ

雑巾ほどあるオムレツ：贅沢

▼ちらつと鋭く象を見た。やも一度ちらつと象を見た。からわかること。

何らかの策略をめぐらせている(たくらみ)

策略の内容：どう利用すれば儲けられるか

白象は儲けるための道具と考えている

第二日曜からもわかる

☆コス・タイ・パ重視の現代社会と照らし合わせ

▼「ずつとこつちにいたらいだろつだい。」にうかがえるオツベルの策略

白象を自分の財産として働かせようと考えた

▼白象はどのような性格だろうか

第一日曜で本文中に出てくる言葉としては

◎のんき 心配事や苦勞などがなく、気持ちや性格がのんびりとしていること。

類気楽

他・疑うことを知らない・素直・純粹 など

◎第二日曜

▼オツベルの顔をしかめて、顔をしかめながら顔をしかめてというしぐさは、何のためか

白象に策略を悟られないようにするため

▼オツベルが白象が逃げないように施したことは

・時計を首にさげる

その心は 百キロの鎖を前足につけるため

・靴を、象の後ろのかかとはめた

その心は 百キロある分銅を、後ろ足につけるため

▼オツベルが少しきよつとしたのはなぜか

白象が森へ行ったまま帰ってこないのではないかと 思ったから

▼白象と状況の変化

仕事	食べた わらの量	発した言葉	晩夕方の月の様子
川から水 をくみ、 畑にかける	十 把	ああ稼ぐのは、愉快だねえ	西の三日の月
森から九百把の薪 を 運ぶ	八 把	ああ、せいせいした	西の四日の月
鍛冶場で、半日炭 を 吹く	七 把	ああ、疲れたな、うれしいな	空の五日の月
朝から稼ぐ	五 把		

◇表の月の様子の変化について理解しよう (西←西←空?)

月は30日かけて朔望を繰り返す。日暮れ時と限定した時、太陽が沈んだ方角(西)にある月(一日の新月)は、15日後に満月となり、東の空から昇る。つまり時間帯を定めると、一日ごと12度ずつ東へ向かって移動しているように見える。

国語学習プリント

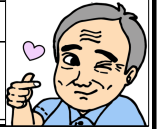
date : 年 月 日

学習内容：ワークシート2

オツベルと象

氏名

年 組 番



☆ 第二日曜までの語り手である牛飼いの価値観をおさえておこう

オツベルに対して：…頭がよくて偉い。オツベルときたらたいしたもんさ。

白象に対して：…実際、象は経済だよ。

語り手という中庸の立場＝一般の読者の立場から見ても象を使って安く儲けることは美徳であるところからえている

◎ 第五日曜

▼ オツベルは少しひどくしすぎたために、白象はどくなっていったのか。

・ なかなか笑わなくなった。

・ 赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。充血した悲しい目ととらえ、オツベルより背の高い象が悲しげにオツベルを見る目としてとらえさせたい。×白象の怒りの目とはとらえさせたくない

▼ ふらふら倒れて地べたに座った白象に助言を与えたものは(二人)

・ 月(白象はサンタマリアと返答している)

・ 赤衣の童子(赤衣着物の童子)

◇ この二人について

サンタマリア＝聖母マリア

赤衣の童子＝善膩師童子

善膩師童子は仏教の毘沙門天と吉祥天(ヒンドウ教ではヴィシヌ神と女神ラクシュミー)の五人の子供の末っ子。子宝・家族の和を深める神。

※ インドの宗教

バラモン教

仏教

イスラム教

ヒンドウ教

神の使いの手助けによって手紙を書く白象

【Wikipediaより抜粋】宮沢賢治は、若い頃に父の影響で浄土真宗の門徒であったが、後に法華経を重視する日蓮宗系の国柱会の信者となった。彼はキリスト教にも少なからず好感を抱いており、宣教師のいるキリスト教会に通ったり、無教会派のクリスチャンと親交を深めたりしていた。

《先生の見解》白象はキリスト教信者ではなく、ましてや仏教徒でもない。

白象は純粹無垢な汚れ無き存在と思われるところから、何にも染まっていない無宗教としての存在である。この二人が出てきた理由は、信者であるなし、信じているかないか、正しいかどうかにも関わらず、誰しもが神とあがめてしまっているものが自然にあるということを表しているのだらう。

▼ 白象の手紙 内容

「僕はずいぶんめに遭っている。みんな出てきて助けてくれ。」

▼ 白象からの手紙を読んだ仲間の象たちの反応

「オツベルをやっつけよう。」

▼ 目をぱちりとあいた時は、もうなにもかもわかっていた。

何をわかっていたのか

仲間の象たちが白象を助けに来たこと

▼ わざと力を減らしてあるんだ。とは、どういうことか。

白象の食料であるわらの量を徐々に減らしていったこと

十把 八把 …… 三把

▼ オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだ。その文句とは

「ああだめだ。あんまりせわしく、砂が私の歯に当たる。」

▼ 【重要】白象は寂しく笑ってそう言った。

なぜ、寂しい笑いののか。(寂しい笑いにこめられた気持ちを推測しよう)

自分の思いが、思いがけない形でとらえられてしまう寂しさ

曲解された寂しさ(ただし、白象は曲解されたと感じていない)

手紙に「助けてくれ」とは書いたが、「やっつけてくれ」とは書いていない

オツベルのところでもっと働きたかったがそれがかなわぬ寂しさ

自分の思いもしない結果に当惑し、戸惑う寂しさ

▼ おや、川へはいっちゃいけないいたら。とは、

子供が連れてきた牛が、川に下りていったのをたしなめる言葉。

現実の牛飼いの語る場面に戻る役割

オツベルの武勇伝・美談ととらえていた聞き手が、オツベルがつぶれていなくなってしまう、つまらなくなり川へ下りたという説もある

ほんとうの幸いとは何か？「銀河鉄道の夜」とあわせ、本当の宗教、人のあり方を考えてみるとよいでしょう。オツベルの宗教は何だろう。あえて言うなら先生は「経済教」かと思います。あれ！現代人は皆……。